

認定特定非営利活動法人
AMD A (アムダ) 代表
 すが なみ しげる
菅波 茂 氏

救える命があればどこへでも

国連経済社会理事会「総合協議資格」NGO
 認定特定非営利活動法人 アムダ

AMD A

尊敬と信頼があつてこそ

去る十月三十一日に、一隅を照らす運動総本部が主催する第十三回「一隅を照らす運動公開講座」が天台宗務庁で開催された。今回の講師は岡山県に本部を置く認定特定非営利活動法人アムダの菅波茂代表。天台宗一隅を照らす運動総本部もアムダの活動を支援している。

演題は「困ったときはお互いさま」であった。第一部の講演の後、第二部では、アナウンサーの植月百枝さんが対談形式で質疑応答を行った。

なお、アムダでは現在、フィリピン・レイテ島を中心として甚大な被害を出した台風三十号の被災地に対する緊急支援活動を進めている。



アムダの活動について語る菅波氏

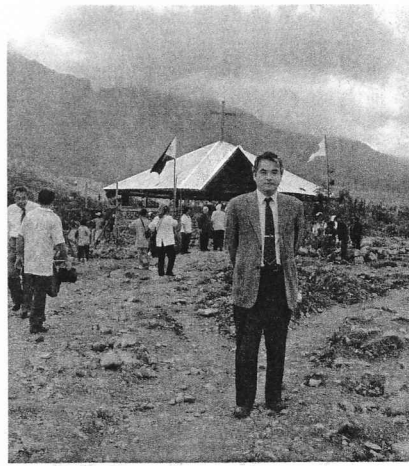
得体の知れぬ活気に
 強烈な衝撃が

アムダ設立のきっかけとなったのは、一九六三年、菅波代表が高校二年生の時に出会った「太平洋戦争写真集」にある。それは祖父の蔵書で、自分と同じ年頃の日本人兵士が、海岸の浅瀬に顔を半分突っ込んで死んでいる一枚の写真が掲載されていた。その写真が、菅波代表にアジアへのこだわりを抱かせることになったのである。

菅波代表は、岡山大学医学部四年生の時に、アジアへ一

人旅に出る。ベトナム戦争真っ最中の頃だった。シンガポールからインドに渡り、アグラにあるアジア救いの協会インドセンターを訪れ、初めて国際医療の現場を体験することになる。

その後、パキスタン、アフガニスタン、イラン、クウェートなど九カ国の放浪を通じ、アジアの医療を身をもって体験することになる。



2006年に発生したレイテ島地滑りから1年後、被災地のコミュニティー広場での慰霊祭に出席した菅波氏。コミュニティー広場はアムダが建設した

ようやくキャンプを探し当てても、受け入れてくれる人は誰もいなかった。情報がない行動は無意味なだけだった。菅波代表は「情熱や善意だけでは何も出来ない」という現実を受け入れざるを得なかった。

アムダは、発展途上国の貧困に苦しむ人々を対象に「困ったときはお互いさま」という相互扶助精神に基づいて国際人道援助活動をしている。異なった国々の医師やスタッフと患者たちを結んでいるのは「多様性の共存」だと思っ。

民族、宗教、文化などが異なった人間が共存する唯一の道は、尊敬と信頼である。「あらゆるトラブルを解決してゆく過程で、苦労を共にすると相互に真の尊敬と信頼が芽生える。自分がない素晴らしいものを相手に見た場合に尊敬が、また、どんなに苦しくても、相手が絶対に逃げないことがわかった時に信頼が生まれる。そして尊敬と信頼という人間関係が築かれてはじめて、生き方やものの見方、考え方が違う人々が一緒に活動出来る。」

験することになる。アジアの国々には共通点があると菅波代表は言う。市場の活気、不潔さ、狼狽さ。老若男女の群れ、いかがわしい物からとんでもない贅沢品。物乞いを職業としている人たち、公私混同などである。

そのためには、アジア各国の医学生と相互理解を深め、互いに情報交換や受け入れ体制を確立するネットワークを作らなくてはならない。菅波代表は帰国後方々を走り回り、一九八四年、ついにアジア

情熱や善意だけでは
 何も出来ない

一九七九年、医師となった菅波代表は、カンボジア難民救援のためタイに入国する。しかし、難民キャンプがどこにあるのかすらわからない。



活動するアムダの医療チーム

アムダを、発足させた。

唯一の道は
 多様性の共存である

アムダの目指す理想について、菅波代表は次のように語る。

「困った時はお互いさま」

第13回「一隅を照らす運動公開講座」



時には聴講者を壇上に招き、意見を交わす菅波氏

「ありがとう」を一日十回以上言う

菅波さんはいつも奥さんに「ありがとう」と言う。意識的に言うようにしているそう。だ。「ありがとう」を一日十回以上言う。

その延長にアムタの活動がある。それは「援助される側にもブラインドがある」ということ。人道支援の活動は、先進国の「特権」ではないのだ。「後進国の医師たちも、他国に駆けつきたいと思っています。自分たちも役に立ちたいと思っています。もっと困っている人を助け、『ありがとう』と言われたいです」と菅波

菅波さんはいつも奥さんに「ありがとう」と言う。意識的に言うようにしているそう。だ。「ありがとう」を一日十回以上言う。

菅波さんはいつも奥さんに「ありがとう」と言う。意識的に言うようにしているそう。だ。「ありがとう」を一日十回以上言う。

心のケアとは 生きていく喜び

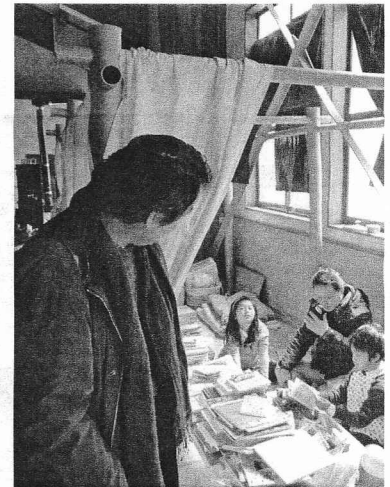
アムタの活動は緊急医療だではない。心のケアである。「医療と魂のプログラム」にも取り組む。そのことは、東日本大震災で顕著だった。

「大事なのは、特別な資格を持った専門家ではなく、被災者の中からこの三条件に合った人を探ることだ」と菅波代表は言う。

二つ目は、生涯を通じてその地に留まる人。信頼関係を真切らない人である。

三番目は、常に被災者の側にいることが出来る人である。

東日本大震災の初期には、おびただしい犠牲者が体育館などに安置された。その遺体を前に、祈りを捧げた宗教者がいる。説経した僧侶がいる。



東日本大震災被災地の避難所で、子ども達の様子を見て回る菅波氏

では、亡くなった人はどうするか

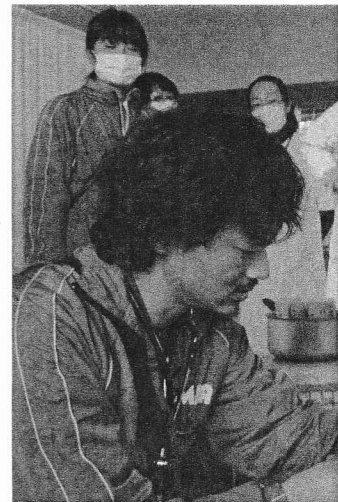
「そのことが、どれだけ遺族の心を癒したか。私たちが「救える命があればどこへでも」言っているが、では、亡くなった人はどうするか、これは魂の問題です。ですから、緊急時には、是非宗教者にコーディネーター（調整員）として現地に入って欲しい。私たちは、押しかける

菅波さんはいつも奥さんに「ありがとう」と言う。意識的に言うようにしているそう。だ。「ありがとう」を一日十回以上言う。

さんは言う。

だから、アムタでは、貧しい国や遅れた地域にある支部の医師でも、緊急の場合ほとんど派遣する。基本は「ありがとう」の一言なのである。互いに立場を変えての「ありがとう」という相互扶助なのだ。

東日本大震災の被災者の方々にも、支援を受け、いつも謝意を表明する立場はかりではなく、反対に「ありがとう」と言われるような立場を作っておくことも必要ではないかと。「ありがとうと言わされる度に、『心の仮設住宅』を作ってしまったのではないかと。その『心の仮設住宅』を壊していくことが必要ではないでしょうか。」



東日本大震災被災地

被災者の手当をしなくてはならない。遺体には、手が届かないのです」と菅波代表は言うのである。

宗教者は、悲しみを共有する中で、お互いの人間関係を強固にしていこうという役割を持つていられるのである。

菅波代表は「震災のトラウマを治すには医療だけでは限界がある。是非、天台宗をはじめ宗教者と共に救援活動

大切なのは、「信頼」であり、決して裏切らないことであるという。

信頼関係で成り立っていたいは「血縁共同社会」で「一番大切なことは「相手が死に瀕した時にどう行動するか」ということ。「その社会で人が死に瀕したらすぐに駆けつけなければいけないのです。見放してはいけない。死者の数で行った行がなかったりするとはダメなのです」。

将来を担う子どもについてもこう言う。「大人の世界の縮図が子どもたちの世界なのです。困った人を見捨てないことを子どもに見せて育てれば、将来、子ども達も他人を見捨てない人になるのです。家庭も世界も菅波さんにとっては、やはり一つなのである。

アムタが設立されて以来、『魂と医療のプログラム』(A S N P) が展開されてきた。

たどればそれは「第二次世界大戦」の傷跡が残っている地域で、戦争で亡くなった人々の魂を敵味方関係なく慰霊し、残された人たちに医療を提供する活動などである。自国ばかりでなく、敵国の人も等しく慰霊する、そうすれば、双方敬意を払う関係が出来る。

大切なことは、その人々が健康であることです。その健康を支援していくことが私たちアムタの使命です。今日の家族の生活と明日の希望が実現できる平和な世界を目指して、活動を続けているのです」と菅波代表は言う。